

NTTデータ経営研究所 ライフ・バリュー・クリエイションユニット シニアコンサルタント 戸高 大我氏

病院DX (13)

人工知能（AI）に代表される先端技術を活用して、医療機器や周辺システムが日々進化している。日本では画像診断など医療機器を中心にAIの活用が進んでいるが、海外ではさらに多様な分野で先端技術が活用され始めており、医療を巡る「患者体験」に進化が起きている。

米国ではアップルの腕時計型端末「アップルウォッチ」のような手軽なデバイスで取得した生体情報を、専門医に送信して、ヘルスチェックを受けるサービスが広く提供されている。

その一つが米ライブコアが開発した携帯型心電計「カルディアモバイル」だ。手のひらに乗るサイズで、両手の人さし指・中指の指先をデバイスに置いて30秒待つだけで高精度な心電図を計測でき、不整脈などの可能性をAIが自動で検出する。年99ドル（約1万5000円）のメンバーシップに加入すると、専門医による遠隔診療を年4回受けられるサービスを提供している。

軽い自覚症状があって定期的な受診が必要な人にとっては、何度も病院に通って検査するよりコストパフォーマンスがよさそうだ。カルディアモバイルは、自宅で使える医療機器を医療サービスにつなげることで、患者の体験を進化させている。

中国では、さらにダイナミックな患者体験の進化が起きている。

オンライン診療を手掛ける平安保険のグループ会社の「1分診療所」だ。さながら電話ボックスと自動販売機が融合したような外観で、診察室と薬の自販機を併設している。患者はまず電話ボックス

先端技術で「患者体験」進化

側の「診察室」に入り、人工知能の医者「AIドクター」から診察を受ける。診察室には血圧計などが用意されており、自分で検査する。AIドクターの診察が完了すると、その結果をもとに、人間の医師が遠隔で診断し処方箋を発行する。患者は処方箋を受け取り後、併設された薬の自販機で処方薬を購入する仕組みだ。

街角で診察から薬の購入まで一気通貫に素早く終わらせることができる画期的なサービスだ。事前予約して病院で診察待ちをし、会計待ちをし、さらに薬の受け取り待ちをするという日本の患者体験と比較すると、違いは歴然だ。

女性の健康課題解決にテクノロジーで挑む「フェムテック」の分野でも、患者体験を進化させる可能性を秘めた医療機器の開発が進んでいる。

香港の医療系IT（情報技術）企業サーダディア・アジアはプラジャー型のウエアラブルデバイス「アイティプラ」を開発した。下着のように身に着けるだけで乳房組織の温度変化を感知する。アプリにはユーザーに受診を勧める機能を備えており、乳がんの早期発見を促すことができる。

乳がんは早期発見が有効ながんで、月1回程度の自己触診によるセルフチェックが推奨されているが、こうした使い勝手のいいソリューションが普及すれば、セルフチェックが高度化するだけでなく、乳がん検診へのアクセスなども大きく変革していくだろう。

先端技術を活用することで、より早期に精度の高い検査や診断、治療を実現できる医療関連機器が日々世界で誕生している。優れたソリューションをサービスと組み合わせ、より良い患者体験を創出していくことが望まれる。

「1分診療所」の利用イメージ

- ①電話ボックス型「診察室」で「AIドクター」から診察を受ける

（適宜ボックス内に設置された血圧計などで自己検査も実施）



- ②人間の医師から遠隔で処方箋の発行を受け、自動販売機で処方薬を購入する